第２回 新カシマサッカースタジアム基本計画検討有識者会議　議事要旨

１　日　　時：令和８年 10 月 23 日(金)　14:00～16:30

２　場　　所：茨城県庁５階 庁議室 及び オンライン

３　出 席 者：資料１（出席者名簿）参照

４　議事概要：

○　第１回会議では、現在のカシマサッカースタジアムの歴史、新スタジアム整備に向けたこれまでの経緯などの前提条件について共有するとともに、委員から、新スタジアムを地域活性化やにぎわい創出の拠点となるよう検討すべきであること、将来の利用需要やターゲットを踏まえた規模や導入機能の考え方などについてご意見をいただいた。

○　県では、第１回会議でいただいた意見等を踏まえて検討を進めるとともに、新スタジアムに対する県民の期待や意見を把握するため、県民アンケート調査を実施した。

○　今回は第２回会議として、県民アンケートの結果を報告するとともに、新スタジアムが目指すべきビジョン、整備方針、スタジアムの規模、費用負担及び事業手法の考え方などについて意見交換を行った。

○　委員からの主な意見については、以下のとおり。

【委員からの主な意見】

●アンケート分析結果及びアントラーズが想定する新スタジアムの来場者・利用者像について

・県民アンケートは重要な資料だが、過去の経験や現在の認識を反映したものであり、現状や既存スタジアムを前提とした回答である。そのため、新たな県の施設を検討するに当たっては、アンケート結果を踏まえつつも、将来を見据えた幅広い視点から検討を進める必要がある。

・県民アンケートでは、鹿島アントラーズの「歴史と伝統の継承」への期待が高く示されており、Ｊリーグが始まってからまだ 30 年余りの歴史でありながら、アントラーズが培ってきた活動が支持され、今後も継続されることが期待されていることが分かる。こうした期待も踏まえ、今後の整備方針につなげていく必要がある。

・アンケートはファン・サポーターの回答数が多いため、ファンではない層やチームのことを知らない層についてもクロス集計等により分析し、どのような機能に関心を持っているのか把握する必要がある。今来ていない人を増やしていくためには、そうした層がどのような属性を持ち、どうすれば来てもらえるのかを把握することが重要である。また、ファン・サポーターの回答数が多い今回のアンケートではスタジアム単体に関する意見に焦点が当たりやすく、試合日以外のにぎわいをどのように創出していくのが良いのかについては読み取りにくい。試合日以外にどのような目的で、どのような人に来てもらうのか検討する必要がある。

・ファンベースマーケティングの考え方では、例えば２割の人たちが８割の収益を生んでいるといったように、一部のファンが周囲に大きな影響を及ぼすことがあり、必ずしも幅広い層に向けた施策を講じることで全体の効果が上がるとは限らず、消費が非常に多い人たちに重点的

に力を入れたほうが、結果的に全体の効果が上がるという考え方もあるため、そのことも踏まえながら検討を進めることが重要である。

・アントラーズが想定する新スタジアムの来場者・利用者像については、地域のプロチームとして、また世界に関わるチームとして熱狂空間をつくり出すという姿勢が示されており、その考え方を踏まえながら検討していくことが重要である。一方で、整備方針においてはファン層だけではなく、やや関心の薄いライト層も取りこぼさないような形で意見を反映していく必要があり、この二つの側面を意識して進めることで、目指している「エッジの効いたスタジアム」となるのではないか。

●全体ビジョン・整備方針（案）

・県民アンケートにも表れている「伝統」は、アントラーズが行ってきた取組に対する評価である。公共施設で伝統というと地域の伝統工芸などを取り入れがちであるが、これまでアントラーズが積み重ねてきた取組や価値を継承・発展させる視点から、伝統の解釈を広げて考える必要がある。

・環境配慮については、長距離の自動車移動等による CO_2 排出が大きな課題であることを踏まえ、スタジアム内の環境技術だけでなく、交通インフラやエネルギー施策など、スタジアムの外も含めたエリア全体で環境対応を検討する必要がある。

・可変性については、県民アンケート結果では、席が狭い、バリアフリーといった容易に変更できない部分に不満が見られる一方で、サインは見やすいという評価が得られている。チームが改善できる部分は適切に対応できていると考えられることから、チームに任せる、あるいはチームと協働するという視点を取り入れることが重要。

・維持管理については、塩害対策の考え方や構造・材料の選定について、他の事例等も踏まえながら十分な調査・研究を行う必要がある。

・まちづくり・周辺環境については、鹿嶋市が取り組む現スタジアム跡地活用や都市計画・関連投資等も含め、県と周辺市が共に取り組む協働体制をどのように構築するのか、その推進体制も含めて整備方針に位置付けることが重要。

・導入機能については、その地域で実際に需要があるものかどうかを踏まえて検討する必要がある。

・可変性・拡張性については重要な視点であるが、「余白」という考え方だけでは意味のないスペースが生じるおそれがある。必要な機能をしっかり作り込んだ上で余白を確保することが重要。

・財源の複線化は重要であり、補助金や交付金等の多様な財源を活用していく必要がある。一方で、国の補助金は目的が定められた公費であり、例えば防災拠点として交付金を活用した場合には、防災拠点の整備により国の政策目的が達成されることになる。それぞれの制度の趣旨や目的を踏まえながら活用を検討することが重要。また、多様な財源確保による財政負担軽減等に関連して、長期・構造化しつつある物価高騰のリスクを早期段階から想定した上で、トータ

ルな視点で適切に検討することが重要。
・県産材の活用については、一部の利用者のみが利用する空間に限定（VIP ルーム等）せず、多くの来場者の目に触れる場所で活用することが重要。
・地域住民や子どもたちがスタジアムや周辺施設をどのように利用できるのかについて、整備方針の中で具体的に示すことにより、地域の人々にとって施設の利用を想像しやすいスタジアムになる。
・整備方針については、「利用方針」と「日常利用環境」は類似する部分があることから、整理して一つの方針としてまとめることも検討する必要がある。
・住民参画・当事者参画の視点が必要であり、要配慮者も含め、地域住民やサポーターなど様々な主体を巻き込みながら、みんなでつくり上げていくという方針があっても良い。
・アクセスは重要な課題であり、現在は試合日にのみ営業停車しているカシマサッカースタジアム駅について、日常的な利用や駅舎の改修・改良を含め、JR や鹿島臨海鉄道との協議を県が働きかけていく発想が必要である。また、CO_2排出の面からも、公共交通への転換や利用促進に向けた方策を検討する必要がある。さらに、パークアンドライドや交通結節点を設けてピストン輸送をするなども考える必要がある。アクセスは重要な課題であることから、JR や鹿島臨海鉄道、周辺市町村も巻き込みながら、県が中心となって取り組む視点が重要。
・サポーター等の試合日の往路の所要時間が平均で片道４時間を超えるという結果を踏まえると、試合日に更に滞留してもらうことは難しいと思われるため、宿泊してもらえるようなコンテンツの導入を考える必要がある。一方で、試合のない日に遠方から来てもらうことは現実的ではなく、「県外サポーターが多い」というアントラーズの特徴を踏まえると、日常利用については、主な集客対象を県外サポーターよりも地元住民に重点を置き、自転車や車で気軽に訪れ、楽しめる機能を充実させるなど、日常利用をどのような要素で組み立てていくのかを検討することが重要であり、鹿行地域の人々に喜んでもらえるあり方を考えていく必要がある。
・整備方針には様々な機能が示されており、いずれも重要な要素である一方、どのように優先順位を付け、重み付けを行い、どのような特徴を持った空間としていくのかが重要になる。また、スタジアム本体だけでなく、周辺施設や複合施設のあり方も重要。
・公共施設として、要配慮者や障害者、子ども、高齢者の視点に加え、見やすさ・伝わりやすさといった環境面を検討するとともに、収益性を高める内容との両立を図る必要がある。

●スタジアム規模、費用負担及び事業手法について

・事業手法については、一気通貫型の手法（設計・建設・管理運営を一体化して実施）をとる場合、リードタイムが長くなるため、当初想定以上の物価高騰等の影響を受け、事業性が低下するということが最近特に頻発しており、落札不調等となるとさらに事業成立まで時間がかかる可能性がある。そのため、一気通貫型の活用を想定する場合には、そうしたリスクを上回るメリットがあるかどうかを検討することが重要。

・財政制約もある中で、物価高騰や事業費増大のリスクをどこまで許容し、誰がどのように負担するのかについて、早い段階から想定しておくことが重要。また、全部乗せのような形で大掛かりになると立ち行かなくなることも考えられるため、どこかの段階で優先順位を付けるなどバランスをとった議論を早い段階から行う必要がある。
・試合時に満員にすることに加え、試合のない日にもにぎわいをつくっていくことが重要であり、その役割は運営事業者が担うことになる。運営事業者がデザインやビルドの段階から関与し、にぎわい創出の考え方を反映させていかなければ、にぎわい施設はできない。運営事業者が関わらないかたちでスタジアムが完成した後でにぎわいをつくることは難しいため、その観点から、事業手法として DBO 方式もあり得る。
・スタジアム規模については、J1 最低基準から AFC 基準あたりを念頭に置きつつも、実際にはチームと話し合いながら決めていくことになると思うが、可変性・拡張性という観点では、増席可能性や拡張余地を確保する考え方もある。他事例でも観客席後方に増設余地を設ける手法などが見られるが、それがアントラーズにとって適切かどうかも含め、チームと連携して検討することが重要。
・スタジアム規模については、ある程度のチケットの枯渇感や常時満員であることが重要。満員のスタジアムを維持することは容易ではなく、年間シートが多く売れていても来場しないケースがあることを踏まえると、現在の規模感は妥当である。
・観客席については、席数だけでなく席種が重要であり、アントラーズの現在の客層や将来にわたって想定する客層、地域・エリアの特性を踏まえて、どのような席をどのようなニーズに基づいて整備するのかを検討する必要がある。また、シーズンシートや VIP ルーム、ラウンジ等についても、多ければよいというものではなく、少なすぎると機会損失にもなることから、チケット収入とのバランスも踏まえた適正な構成を検討することが重要である。